

後拾遺集「題しらず」歌の二、三の問題

山之内 恵子

後拾遺集の詞書の表記法は、本集が和歌史の転換期の勅撰集であるという点からもその検討の必要性が問われている。詞書は、歌を理解する時に場面や関連などを表示しその歌を解釈する一助になる。それが、特に勅撰集のような場合には、撰者自身の撰集方針がそこに示されるということにもなる。本集の特色の二に掲げられる詳細で具体的な詞書に対して、一方では「心を詠める」といった題詠歌につながってゆく傾向の詞書が頭れ始めるのもこの期である。

また、これと同時に、その歌の題や詠まれた事情等が不明である場合に従来から表記する「題しらず」も、時代の推移と同時にその法則も徐々に変遷しているようである。たとえば、詠歌事情が解つていても、それが特記するに値しないと判断されたときにはあえて「題しらず」と付すなど、そこには撰者の意図が示されることとなる。このように詞書をめぐる問題は種々あつて、綿密で多面的な検討が必要であるが、本集を読んで行く段階で、この「題しらず」歌にいくつかの疑問を感じたのでそれを以下に考察してゆきたい。

なお、後拾遺集の本文は、糸井浩造、渡辺輝道編「後拾遺和歌集総索引」に拠つた。

後拾遺集の一〇八首の「題しらず」は、春上18、春下6、夏7、秋上14、秋下3、冬6、賀2、羈旅1、恋一11、二7、三9、四14、雜一3、二1、三2、四1、俳諧4首に分布する。四季歌にその半數が分布し、また恋部、特に恋の過程の最終部である恋四にその三分の二が「題しらず」歌であるのも、その状況を詞書に依存せず、独立した巻を形成しているという現象は、歌の性格上必然性が認められる。その上、この分布が人事的な巻である別、哀傷には全く存在せず、また極めて少ないという現象は注目されるところである。後拾遺集の編纂方針に、歌の成立事情をなるべく具体的に記そうとした意図のあること等を考え合わせると、このような現象は充分に理解できる。と同時に逆説的な意味では、詞書なしに「題しらず」とすることで歌が一つの独立した括がりのある世界を打ち出すことも効果として考えられるのではないだろうか。この点に関しては後に述べることにしたい。

次に、この「題しらず」の作者という側面から考察する。古今集の「題しらず、読み人しらず」という当然な形は、後拾遺集では二十一首と限少している。この点については前述した編纂意図に基づい

ているものと思われる。その「題しらず、読み人しらず」の概観を簡単に述べれば、古今集では「題しらず」はすべて「読み人しらず」であり、また後撰集には、「題しらず」は少なく、「読み人しらず」歌に対しても、その歌の詠まれた事情を物語る詞書を重んじて、とりわけ歌物語のような内容のものを進んで採取しようである。

このような三代集の推移を背景に次に本集の「題しらず」の作者を多い順に列挙すると、和泉式部¹¹、源道濟⁷、相模⁶、曾禰好忠⁵、藤原元真⁵、永源法師⁵、能因法師⁵、長能⁴、斎宮女御³首という具合になる。このうち、和泉式部、相模、好忠、能因は後拾遺集の代表的歌人で、この歌人等に「題しらず」歌が多いことは、典拠となつた百首歌や家集が実際に詞書を持たなかつたということであり、この点で「題しらず」とせざるを得なかつたのは当然なことである。そのうちでも特に和泉式部の歌は、他の歌人をぬきん出ており、入集する歌の三分の一(六十七首のうち二十三首)が「題しらず」とする。これは、和泉式部の歌が優れ、あえて詞書に依存することなしに単独でその文学性を主調とすることが可能であるというものだが、その中でも必要性が認められ詞書に「題しらず」と付したのはなぜだろうか。この点については上野理氏も述べられるように、勅撰集は一般的に各主題ごとに歌を何首かにまとめて配列するが、前述した和泉式部の場合もその主題の表示という意味もあつてあえて「題しらず」としたのであろう。そういった点では相模や好忠、能因の場合もこれと同じ理由に拠るものであろう。

ところで本稿で問題にしたいのは、先に列挙した作者のうち、源道濟、永源法師、藤原元真はその入集歌のほとんどが「題しらず」とする点である。道濟は、和泉式部や赤染衛門、長能、公任等とはほぼ同

じ時代の歌人、永源は康資王母、白河院、素意と同じく後拾遺集撰者通俊の時代、つまり当代の歌人であり、また元真は、ずっと時代がさかのぼる後撰集時代の歌人である。このようにそれぞれ異なつた時代の三者の歌人達に「題しらず」歌が多いというのはどのように受けとめたら良いだろうか。そこでこの三者に限って、「題しらず」の意味するところを以下に探ってみたい。

源道濟は、本集に二首を入集する中古三十六歌仙の一人である。父は従五位上能登守方国で、曾祖父に公忠、祖父に信明がいる。歌学者としての名声も高く、「道濟十体」^(註2)を著わし、また漢詩家にも秀いでている。道濟に関しては、五島和代氏に詳細な研究がある。

本集に二十二首を入集する道濟の詠歌のうち、「題しらず」歌は七首(316 318 341 406 780 993 1202)で、このうち316 341 406 993の四首は家集(『私家大成』中古II所収。書陵部蔵「道濟集」)に見えている。

316よそにのみみつゝはゆかし女郎花折ん袂は露にぬる共は、秋上、女郎花を詠じた歌群に配された歌だが、家集47には「左大臣殿の秋花ご覽せし御共にて」という詞書が付されている。五島氏は前述論文で、この左大臣を「彼がはじめて官位についた長徳四年(九九八)以後のものなら、左大臣とは道長のことか」と考証されている。家集にこのような当然で、何の問題もない詳細な作歌事情を表わす詞書を有するのにどうして「題しらず」としたのであろうか。また、

341みわたせは紅葉しにけり山里にねたくそけふは独きにけり(秋下)にも、家集には「朱雀院に参りたりしかば、山の紅葉いとおもしろかりしかば」とある。この詞書もあえて「題しらず」と記さなければな

らなかつた事情は見当らない。後拾遺集の編纂意図に反して、このように具体的な事情を削除することは文学的にどのような意味があるのだろうか。その一つのアプローチとして道済のこの二首を配列の面から眺めてみよう。316は、秋上の一〇〇首中八十四首目に配され、女郎花を題材に詠じた歌六首の最終に置かれている。ここには、主題のしめくりを示唆される。詞書の「左大殿の秋花ご覽ぜし御共にて」は道済の私的状況を非常に説明しすぎているからいがあるのではなからうか。そこで撰者は、あえて詞書を切り捨てることでこの歌を生かしたというふうに考えられはしないだろうか。

314は、秋下の砧三首、後月二首、木枯一首に続く紅葉を詠む最初の歌だが、この歌の前には大宮越前の「山家秋風といふこゝろをよめる」と詞書された、

340山里のしつの松かきひまを荒みいたくな吹そこがらしの風
という歌がある。詞書に「心を詠める」といった後拾遺集でしばしば問題にされる複雑な題によって詠じられた一つの世界が、詞書と歌で完結されている。この歌の掬がりを受け継ぐかのように314歌は紅葉の詠歌へと導くのである。

つまり、その主導権を荷ったのがこの歌であったのであろう。歌が詞書を切り捨てることで詞書に依存せず歌単独で充分その効力を發揮する場合もあるはずである。

特にそれが、四季歌のような場合は詞書の形態が、巻全体の文芸性とも結びついてくるものなのであろうか。本集の詞書が、一般的には、詳細であるという事実とらには、前述した道済の「題しらず」歌の背景には、少なからず他の表記と区別するような撰者の試みがなされたのではなからうかと思われる。

七首(81141254-666-674-845)が入集する永源法師は歌壇的にそれほど活躍の認められない歌人だが、七首という白河天皇、素意、弁乳母、少将義孝、兼澄等の当代歌人と同じ歌数を与えられているという点は、注目すべきだろう。時の歌壇界の有力者でもあった源経信であっても六首の入集である。この七首入集の背景には、何らかの事情があったのであろう。永源は、後拾遺集の勘物などから、肥後守敦舒男で、観音寺の別当であり現在では伝わらないが家集を有し、山人と号されていたことが明らかになっている。また、兄に本集の作者でもある伊勢守藤原義孝がおり、後にも触れるが、永源をとりまく近親者には比較的本集入集の可能性を大とする人物の存在のあったことも掲げておかなければならない。

永源の七首のうち、次の

これたふの朝臣にかはりてよめる

666夜をこめてかへる空こそなかりつれうらやましきは有明の月

(恋三)

依月客来といふこゝろをよめる

845われひとりなかめてのみやあかさましこよひの月の朧せは

(雑三)

の二首にはこのような詞書があるが、のこりの五首は「題しらず」歌である。

666は、詞書が記すように惟任の代作であり、惟任との関係が問われる。惟任は、母を近江守源高雅女、つまり従三位懿子が前夫の子であった惟任に対して、宮中仕えに多忙であった為に、永源の母を乳母としていたらしいことが判明する。永源が惟任の代作をしているのもこのような関係が両者に存していることに拠るものであるら

(註3) 永源という歌壇的にそれほど活躍の認められなかった者に七首もの歌を入集させたのは、惟任の母と撰者通俊の祖母が姉妹関係にあった為に、存したらしい永源の家集が撰者に充分手に入る可能性はあったのであろう。

この二首の他の五首は、すべてが「題しらず」として入集する。

題不知

81さくら花さかはちりなむと思ふよりかねてもかせのいとはしきかな
(春上)

は、桜の開く前より風がわずらわしいと詠み、その発想は古来の歌作上の伝統を破って、新しみが感じられる。また、その表現も非常に口語的である。

題不知

山心から物をこそおもへ山桜尋さりせはちるをみましや
(春下)
も、花を尋ねるならば、花の散るうきめも見ることであり、と同時に心からもを思うことだという詠法は直接的でおもしろ味がある。また

題不知

254身をつめば入もおしまし秋の月山のあなたの人もまつらん
(秋上)
では、「自分の身をつねって人の痛さを知る」ということを知っているので、私が待つごとく山の向こうの人の為に月のかくれるのを惜しむまいといった、八代集抄では「怒の心也」と注したように相手の心を思いやった詠みぶりとなっている。またその発想もひとひねりした感がある。

65恋してふことをしらてややみなましつれなき人のなき世なりせば
(恋一)

65あひみての後こそ恋はまさりけれつれなき人を今は恨し(恋二)
は、恋の歌だが、両歌につれなき人が登場する。65は恋一の終わりに近い部分に配された歌だが、相模の「つきもせず恋に涙をわかす哉こやなぐりの出場なるらん」、続いて道信朝臣の歌で、詞書に「女のもとにつかはしける」とある「あふみにかありといふなるみくりおふる人くるしめのつくま江の波」という歌に続いており、いずれも歌枕を読み込んでいる。永源の歌はこれらの歌の後に配され、赤染衛門の詞書も何も付されていない「つれもなき人を哀といひてまし恋する程にしらせたにせば」と同じくつれなき人を読んでいる。恋一の構成上、撰者の意図にはあえてこの二首を並列させる点からで、永源の歌に「題しらず」としたのであろうか。

以上のように「題しらず」と詞書された永源の歌は、その着想に独特な捉え方のおもしろみが感じられ、日常語や俗語の使用や、その本意を逆説的に読んだりする、いわゆる後拾遺集でよく言われる「をかし」に通ずる部分がそこにはあるようである。

金葉集巻十に永成と永源の次のような連歌がある。

田中に馬のたてるをみて

697田にあはむ駒はくろにぞ有ける 永源法師

苗代の水にかけと見えつれど 永成法師

苗代水に影が映っているの鹿毛かと思ったら、田に縁のある馬の馬で有ったと言うのである。「俊頼口伝集」に「田にくるといふ所のあるに、又馬にも黒と申馬のあれば、なはしろ水にはかげとみえつれど、くろにぞありけるといふは、まことにたくみなり」と評されている。

相手となった永成法師は、越前守源孝道の子で後拾遺集には65、

恋一に「こひしなむ命はことの数ならでつれなき人のはてそゆかしき」という歌のみを入集する。また、永源の父源孝道の息に下野守政隆がおり、その女子に本集作者でもあり、「四条宮下野集」を有する下野がいる。永源は下野の従兄弟ということになる。

このように、永源と永成は共に交友関係が認められ、特に連歌などでその才をふるったようである。永源の口語的で新奇な発想の歌は後の時代の新しい連歌として大いに花開いたようである。

本集に七首 76・107・773・807・808・970・985 を入集する藤原元真是、後撰集時代の著名な歌人で、三十六歌仙の一人として掲げられる。「三十六歌仙伝」によると、甲斐守清国の三男で、天曆六年（九五二）三月修理少進に任じ、康和三年（九六六）正月廿七日に丹波介に任ぜられた。家集を有し、本集との共有歌は七首である。このうち題しらずは五首（76 107 773 808 970）で、107 は元真集にはなく後拾遺集にのみ存在する歌でありこの典拠を示す資料は見当らない。あるいは私撰集等を考えるべきなのであろうか。

元真の入集歌のうち、807 は詞書に「天徳四年内裏歌合によめる」とあり、808 はその歌合の選外歌である。同じ歌合中の入選歌と選外歌を並べるといふことは、そこには当然この二首の区別が必要となる。そこで選外歌の方を「題しらず」と詞書することによって区別したのであろう。元真の場合には以上のような理由があり、「題しらず」を用いたと考えられる。

以上のように後拾遺集の詞書に「題しらず」と付された歌には、いく通りかの理由の在ることが明確になった。その一つは、道済の歌のように入集典拠となった家集にはその歌の作歌事情を述べた詳細な詞書を有するの、あえてそれを削除して、歌そのものの主題を強

調する為に「題しらず」とした場合である。また、一方では永源法師の場合のように、歌が日常語や俗語などを多くとり込み、その発想も新奇な歌が目立っている状況のとき、撰者は歌の独自性をより強く表示しようとしてあえて「題しらず」と表記したようである。そしてまた元真の場合は、これらの歌人の「題しらず」の事情とは異なって歌合で出詠された歌を配列する際、入選歌と選外歌の別をつける意味で、この「題しらず」を記したという場合もある。

単に、撰集の際の題が不明であった為に「題しらず」とする一般的な法則から、和歌史変遷上、特に後拾遺期に至っては詞書の表記法にも複雑な錯綜が見られるのである。今回は、題しらず歌の多い歌人に限って狭い範囲での意味するところを探ってみたが、この点については、歌集、先行の勅撰集などに統一性のある分析研究がぜひ必要なのであろう。それらを踏まえてそこに一つの法則性を見出すべきなのであろうが、今回は後拾遺集の「題しらず」歌のいくつかにいささかの疑問を持ったので考察してみた。この問題に關しては私自身の今後の課題にしたいとも考えている。

（註1）上野理氏著『後拾遺前後』「後拾遺集と和泉式部集諸歌群」の項参照

（註2）五島和代氏「源道済試考」〔文芸と思想〕32・50・3）

（註3）神津真佐子氏「後拾遺和歌集研究」一、藤原義孝一附 永源法師〔古典と民俗〕6・53・7）